

bnkrR

ボンクララ

特集 青空プロットロック

大塚英志「物語の体操」を再び実践する



目次

企画『青空プロットロック』

大塚英志『物語の体操』

〈とりあえず「盗作」してみよう〉を実践する

漫画『青空ファインダーロック』 うめ

青空ファインダーロックの骨格を持った全く別の物語。

プロットを流用しつつオリジナルを作れ！

企画小説『He is inside, She is outside.』 republic1963

テツローは、『週刊ラスプーチン』の編集者。

ある日仕事の打ち合わせのために「つぶやいたー」を開くと

オススメユーザーに知人とはか思えないアカウントを発見する。

企画小説『青空ブロウイングアップ』 星野トレン太

健司はパンツの仕上げに一目置かれている漫画アシスタント。

そんなある日、死ぬほど好きなマンガのスピノフ企画が。

企画小説『青空ライジングデッド』 tk_zombie

テツローは、動遺体管理部に務める契約社員。

彼はネットテレビ用の取材を受けているときに

隔離地域の監視カメラにかつての同僚の姿を見る。

都市伝説のジョブズ 松永肇一 (ma2)

スティーブ・ジョブズと兄の手伝いをする妹のパティ。

1976年の彼らが都市伝説をめぐる事件に巻き込まれる……

でんと 城島はむ

幼なじみの面影に誘われ電子図書委員『でんと』になった僕。

お姉さんになった彼女と紙の本の記憶。

機人の愛 迷路平蔵

ロボット三原則第三条のみを持つ執事型アンドロイドと

その右腕を自分のものとした機械の神を信奉する少年。

似て非なり 平井太郎

千葉で歯科医を開業する私はある日一人の患者に強烈な違和感を覚える。

人のようで人でない「似て非なる」者に恐怖する私。

企画『青空プロットロック』説明

大塚英志氏の『物語の体操』の第二講は「とりあえず「盗作」してみよう」です。なんともぼんくら心を打つタイトルではありませんか。大塚さん《誤解を覚悟で記せば、「盗作」こそ物語のための基本的な技術だと僕は考えます。》とまで言ってます。とどめを刺すかのように《「創作による完全な著作物」が本当に存在するとはどうてい思えないのです》ぜ、旦那。僕たちが日本語を文法からではなく「口移し」で覚えたように、物語の構造を「盗作」を通じて学べということでしょう。きっとそうだ。たぶん、そうだ。

「うめ」（『物語の体操』を援用してデビュー作を描いたとの噂）の『青空ファインダーロック』は、電子書籍絡みで言及されることが多いけど、短編漫画ながら凝ったプロットの佳品だ。このパクリ甲斐がある短編漫画をお題とし、ぼんくら部隊がプロットを作成してみました。どこに注目してプロットにしたのか、何処にアレンジを加えて来たのか？ 元のプロットは同じでも、どれほど異なる物語が生まれるのか。そのバリエーションをお楽しみください。

青空プロットロック ルール

1. 元ネタ漫画『青空ファインダーロック』を読み、各自プロットに起こす。
2. 起こしたプロットから物語の骨子を抜き出し、それを元に短編小説を書く

特別おまけとして、うめ本人によるコメントつき！ プロットをパクられた本人が評価するというある意味贅沢で前代未聞の試み！ ぼんくらは打たれ弱いので、お手柔らかにお願いします。

抜き出されたプロットのキモは何か？ 新たに追加された要素は生かされているか？

ぼんくらだって、やればできる！

ビデオカメラが俺を見つめている。俺は息を吸って口角を上げて、なるべく明るい声を出す。

「私たち動遺体管理課はゾンビからみなさんを守るために日々働いています」

カメラマンが困り顔を受けてデスクがいう。

「おい、テツローちゃん。ゾンビじゃねえよ。動遺体」

NGだ。まあ声も裏返ってたし、ちょうどいい。

カメラマンは普通のワイシャツにチノパン。気弱そうな笑顔で「もう一度お願いします」と人差し指を立てている。その横でニヤニヤしながらこちらを見ているのがデスク。金髪で浅黒い肌、派手な色合いの丸メガネにアロハシャツ。ゾンビの監視よりテレビのディレクターのほうがしっくり来るので、突然言い出した取材の話も妙に違和感がなかった。

「しょっぱいネットテレビなんだけだよ」

デスクが小馬鹿にしたように下唇を突き出して言った。

「まあ、なんだ。チメイド向上にはいいだろと思ってな」

「へえ」なんで俺にそんなことを？ と思っていたのが顔に出たのかもしれない。

「お前に出てもらうから。まー若いし。俺よりぜんぜんさわやかだしな」

「は？」冗談じゃない。「他にも若い奴はいるでしょう」

「いやーなんかテツローちゃんが一番きりっとしてるしさ」

「こういうのは女性のほうが受けがいいですよ」

「実際多いのは男のほうだろ？なんつの、ジャアナリスト的に事実に近いところを撮りたいんだとさ」

何をいってもものりくらりと返されて、気がついたら承諾した形になって当日になった。

「みなさんご存知だと思いますが、人が死んだまま放置しておく動き出して他の人間を襲うことがあります。これが動遺体です」

デスクがカメラの横で笑いをこらえているのが目に入る。ムカついて多少緊張が和らいだ。

「動遺体が発生した区域は隔離して、定期的に監視します」

発生区域に兵員を投入して殲滅していた時期もあった。しかし兵員の人権、あと信じられないことにゾンビの人権を主張する団体が官公庁を日参した結果、実に日本的な結論になった。『放置して様子を見ましょう』

「私達、動遺体管理部は二つの課に別れています。ひとつはわたしたち監視警備課。カメラから隔離地域を監視して、異常があった場合はもうひとつの巡回警備課が現地で確認します」

さらにいうと、動遺体管理部は税金で運営されている。だから一見すると公務員のようなが俺たちは契約社員。福利厚生はそれほどよくない。まあそこまで説明する必要はない。

「動遺体が発生した区域は最大で三年隔離されます。動遺体因子の半減期の実に約三倍。十分に安全を考慮した期間です」

実際は動遺体になる因子は特定されていない。ある日突然死体が動き出す。一体動き出すと何故か近くにある他の死体も動き出す。一定期間経過すると何故か死体が動かなくなる。すべて理由は分からない。死体が動いている期間がいまのところ最長で一年。だから三倍様子をみることにした。それだけだ。

「こちらが監視コンソールです」

画面はタッチパネルになっている。指で弾いてパスワードを入力する。

「全国の施設とネットワークでつながっています。よく誤解されますが、わたしたちは担当の施設がどこか知らされていません。これはわたしたち監視担当者が不正に情報を活用しないためのシステムです」

たとえば家の近くの施設からゾンビが逃げ出しそうになっていたら、家族に連絡を取りたくなる。しかしそれを許容してはパニックの引き金になりかねない。これが表向きの理由。もう一つ裏の理由は担当者の責任とストレス低減だ。監視のミスは人命に関わりかねないが、一人ではその重責を追い切れない。だから人件費の安い契約社員を大量に雇って、死体台のボタンを複数に分けるように責任を希釈している。

「動遺体管理施設は区画が区切られていて、万が一動遺体が管理区域から外に出てもすぐに隔離できるようになっています」

死体が動くようになって数年。厳重に管理されるようになったこともあり、今は管理施設以外に死体が置かれることは少ない。病気なら死ぬ直前に移送されるし、不慮の事故があった場合は事故現場ごと「消毒」される。だから俺たちの監視対象は管理施設に限られる。

「監視する画像が手元のコンソールに転送されます。画像はプログラムでも解析しています。プログラムで検知できない微妙な違和感を探るのがわたしたち。経験がものをいう仕事なのです」転送された画像は実験施設らしく壁は殺風景だが、棚も机も横倒しになって荒れ果てていた。かなり期間が経過した施設だ。

「問題がなければ完了し、次の画像に移ります」

タップ。フリップ。画面が切り替わる。

当然だがよほどのことが無い限り異常は発生しない。ただ動きのないモニターを眺めるだけだ。それでは退屈だ、ということで過去の事故映像をオーバーラップして流す手はずになっていた。デスクがどうやってそんな無茶を通したか知らないが、何か上に都合の悪い機密映像を握っている、という噂もあった。

画面によるよると歩く人影が映し出された。完成版では画像は以前の事故のもので、とかテロップでも入れるのだろう。タップ。そしてそのまま親指と人差し指でディスプレイを押し広げるようにしてズーム。

「……？」手が止まる。この部屋、見覚えがある。「……デスク、これほんとに録画ですか？」デスクがテツローのモニターを覗き込む。

「ちょっと待ってろ」

自分の席に戻って内線でささやく。

突然。目の前のコンソールに「緊急事態」の赤い文字。

「テツローちゃ〜んお手柄お手柄。まだ差し替えてなかったって、映像」
途中からデスクの声は耳に入らなかった。赤くふちどられたモニター、中央でうごめく人影。その人影は三年前の巡回警備課の制服を着た……女性。浅くなった呼吸を悟られないように深くため息をつく。

まさか。あれはカリナだ。

俺とカリナはどちらも新卒で同期、二人とも巡回警備課に配属された。

巡回警備課と監視警備課はそれぞれジュンケー、カンケーと呼ばれていた。ジュンケーはカンケーを「腰抜け」、カンケーはジュンケーを「能なし」とバカにしている。だから歓迎会では先輩からカンケーの悪口をたっぷり吹き込まれた。

「モニターの陰に隠れるカンケーなんざ誰でもつとまる！」

「適当な中途社員を大量に雇って経営を圧迫している！」

「身体を張って市民を守っている精鋭は俺達だ！」

体育会系が多いからノリが合わなくて困っていると、

「きみはどうしてジュンケーに!？」

肌は疲れ気味でも目はきらきらさせている角刈りの先輩が話を振ってきた。

「ゼミの先生に紹介されて、他に就職先も無く」とはいいにくいから「家族が昔ちょっと……」といわくありげに嘘をついて目を伏せたら話が盛り下がって次に移った。カリナだった。

異例の女性新人、しかもかなり美人だ。周囲の空気に期待が満ちた。華奢なくせに既にピッチャーひとつ分くらいビールを飲んでいたカリナは、きょとんとした顔でこう応えた。

「だって、助ける人を見つけたときにモニターごしで何もできなかつたら、すごくすごく悔しいじゃないですか」

俺は正直それを聞いて、そういえば俺って人を助ける仕事だった、と思い出すくらいだった。カリナはにっこり笑った。

「現場にいれば、助けられる人がすぐそこにいる。きっと自分でなんとかできる」

ジュンケーの仕事は単純だ。要は「カンケーが見つけた異常の原因を確認してくる」これだけだ。異常はゾンビそのものであることもあるし、隔離区域に紛れ込んだホームレスの場合もある。人権保護団体の地道な活動のおかげで、「隔離は政府の責任でやることだから迷い込んだアホも助けなくてはいけない」と世論がうるさく簡単に見捨てるわけにはいかない。だからゾンビがうるついてたら報告し、居眠りしているアホがいたらたたき起こして連れてくる。

職業自体の歴史も浅く、人の入れ替わりが激しい。だから最低限の注意事項以外、ルールも新人教育もほとんどなかった。つまり、好きにやれということだ。俺はおっかなびっくり現場に入ったが、カリナは最初からほんとうに好きにやっていた。先頭を切って飛び込み、戻ってくるのは一番最後だった。ゾンビの少ない経路、地図にない抜け道を見つけて突き進み、普通なら助けられなかった要救助者を何人も助けた。カリナはずば抜けて有能だった。まるで踏み出す先に道が開き、目を向けた先にケガ人が倒れるようだ。

先輩たちをすりと抜けて駆けていくカリナの背中を、俺は必死で追いつがった。比べられるのが嫌だったからだ。体力では勝っているはずだという、男としてのプライドもあった。気がつくと先輩たちを置き去りにしてカリナと二人きりになることもしばしばだった。カリナはすらっと手足が長いモデル体型で足も速い。その上迷いが無い。俺は振り回されてヘトヘトだった。カリナは振り返って、息も絶え絶えの俺に笑いかける。

「いやあ、人がいるっていいね。寂しくない」

カリナを追い回すうちに、あっという間に半年が過ぎた。出勤前には

「よう、きょうもカリナのケツを追い回すのか？」

がんばれよ、とガラの悪い先輩から肩をはたかれることも多い。

ほんとうにその通りだから怒る気にもなれない。確かに現地で一番記憶に残っているのはカリナのケツだ。きりっとかしこまった形をして、あまり揺れない固そうな尻だった。外野にどう思われようとかまわないが、カリナにも尻ばかり見てると思われるのはちょっと困る。だから俺はカリナに並ぶ方法をずっと考えていた。

機械の音が淡々と響く。

「エリアF 8の個体を先頭に二十、いや、三十がリーク。F 8からF 7にマーチ」
状況報告はすべて人工音声だ。監視と報告は人間だが、それをまとめるのはシステム。これも担当者の責任を希釈する工夫のひとつだ。最終責任はルールとシステムが取る。システムは空気を読まないから声音に緊迫感はない。

「エリアF 7西シャッター、シャットダウン申請」
ゾンビの進行方向にあるシャッターを閉じて、区域を隔離する、と提案している。

「いいよ、やれ」
デスクがコンソールを叩く。

「ハードウェアエラー、シャットダウンできません」
「ほう。その先は？ とりあえず出口にまでの扉を全部閉じてみろ」
「D 7、D 6、C 6、C 5……、各区域でエラーが発生」
「メインモニターに出せ」

モニターに見取り図が映し出され、故障しているシャッターに赤いマークがついた。動遺体の現在地から出口まで、ミミズがのたくるように赤いマークがつながる。多少蛇行していて時間はかせげるが、完全に封鎖することはできない。最外郭のシャッターだけが頼みの綱。それが破られたらゾンビが外に漏れ出してしまう。

白い点がのろのろと動いている。デスクがいう。
「この速度なら最外郭のシャッターまで四十分でところだろ？ どうだ？」
「演算結果と一致しました」
「三十体であの型のシャッターなら破るまでに二十分。これはどうだ？」

「演算結果と一致しました」
「ジュンケーはいつ着く？」警告と同時にジュンケーには出動要請が自動的に出ている。
「つい先ほど最寄りの支店から車両が出ました。到着まで……六十分」
「クソあの遅漏ども！ ギリギリじゃねえか！」

デスクが笑って椅子に身体を投げ出した。推測値は多めに算出しているから、実際にはもう少し余裕があるはずだ。時間通りにジュンケーが着けば、まずシャッターを補強してさらに時間が稼げるだろう。

「ちょっとヒヤッとしたなあ」
俺は自分のコンソールに動遺体の先頭を映した。何度みても間違い無い。カリナだ。動遺体には生前の記憶が残っているとされていた。現場の人間でそれを疑っているものはいない。単純に人間を襲うだけではない動きをする奴が確かにいるからだ。変わり果てたカリナはゆっくりだが迷いの無い足取りで着実に進んでいた。群れがそれに追従する。まずい。足取りは遅くても、ムダが無い。無さ過ぎる。一つ区域を通過して、デスクが異変に気づく。

「おいもう一度計算しろ！今のペースだと出口までどれくらいだ？」
「三十分です」

十分足りなかった。

カリナに並ぶ方法を考えてはみたもののなにも思い浮かばなかったのも、とりあえず脚力から鍛えた。力任せの運動量で何とか尻だけではなく少し後ろから横顔を見られるようにはなった。切れ長の目。まだその先には入れない。

カリナは有能すぎた。配属以降の成績は前代未聞。先輩も含めた全課員の中でもずば抜けていた。危険な場所にも迷うことなく突撃するから、次第に周囲は引いていった。「おれたちのほうがさぼって見えるから」という理由でちょっとした嫌がらせもあったらしい。

俺は同期の気安さもあったから、以前と変わらない態度で接することができた。自然とカリナと話す機会は増えて、ときどき飲むくらいになった。「ほんとは毎日飲んでるのよねえ」とカリナは笑った。よく食べてよく飲む。大口を開けて笑いながらいろいろなことを話した。子供の頃の話。学生時代の話。両親はいずれも研究員で、カリナが学生時代の頃に施設の事故で死んだ。あと一歩のところまで救援が引き返したと言ったときも、カリナの笑顔は変わらなかった。しかし俺は耐えきれなくて話題を変えた。

「お前、なんでいつも迷わないの？」

「何が？」

「現場でさ。ぜんぜん迷わず突っ込んでくださる。それで不思議と間違っていない」
仕事の話いと笑って、それからコップに口をつけながらいった。

「ルート」

「ルート？」

「なんかこう、浮かび上がってみえるんだよね。一見ムリそうでも通れる通路。人が隠れてるとこへの道筋。あたしはそれをおっかけてるだけ」

切れ長の目が少し潤んでいる。カリナが見ているものを俺も見たい。そう思った。

次の日から俺はカリナの視線の先を追った。目先だけ見て突進していた俺と違って、カリナは広く的確に観察していた。表示案内、シャッター、動力コード、落ちているゴミ、足跡。特定のポイントに視線を走らせて、収集した情報を統合する。適切なポイントに絞るから観察が短時間で終わる。だから判断と初動が速い。俺にはそんな才能は無い。だからひたすらマネした。作戦が終わった後にはカリナの視線を思い返した。出勤先の施設の見取り図を手に入れて、ルートを書き入れたりもした。そうやって何度も何度も振り返った。

さらに半年経った頃、俺にもぼんやりとルートが見えるようになってきた。道が浮かび上がるというよりも、自然と目が離せなくなる感覚だった。それでもカリナの思い切りの良さには勝てず一拍遅れてしまうことがほとんどだったが、ときにはカリナとぶつかりそうになることもあった。そういうときには目を合わせて笑った。戦績もぐんぐん伸びたから、周囲の見る目も変わってきた。しかしそんなことより、俺はカリナと同じものを見られるようになったことがとても誇らしかった。

「デスク。俺、現地にいきます」

デスクがぼかんとした顔でこちらを見た。

「何いってんの？テツローちゃん」

「俺、昔ここにいったことがあるんです。飛ばせば四十分かかりません」

「黙ってモニター見てろ」

俺はそれには従わずに声を張り上げた。

「俺が時間を稼ぎます！」カンケーに移った今も身体は鍛え続けている。カリナは俺が止める。俺がやるべきだ。

デスクは立ち上がってこちらに来た。ぼんと肩に手が置かれて

「そっかテツローちゃん。いいたいことは、よくわかった」

突然胃に何かを差し込まれたような気がした。続いて襲ってくる吐き気。

「そこでじっとしてろ」

デスクにかかえこまれたまま、椅子に押し返された。みぞおちへの一撃。予想外で気づきもしなかった。

「お前、監視なめてるだろ」

腹から突き上げる不快感が頭をかきまぜる。残念ながら意識ははっきりしている。俺はうなづきもせずにデスクを見た。

「お前がなんか知ってるのは分かってたよ。顔に出過ぎなんだよ、バカ」

デスクは画面を切り換えて動遺体の群れを映す。先頭に居るカリナ。

「ありゃジュンケーの制服だろ。知り合いか。いい女だったんだろうな」

無神経なズーム。変わり果てたカリナが大写しになる。俺は目をそらした。

「テツローちゃんも隅におけねえな。直接ケリつけたいってことか？」

デスクがさらに画面を切り換える。赤いマークのついた見取り図。動遺体。電圧、シャッターの状況、空調、照明、各種のパラメータ。

「なあ、自分で手を動かすだけが仕事じゃねえぞ。ゾンビの動き、施設のトラブル。それ含めて全体を見れるのはここだけだ。それにお前が最初の発見者だ。非常事態では第一発見者がメイン、他はサポートだ。現地でジュンケーがなんかやるときに最初からの経緯が必要になるかもしれねえ。そんなとき一番的確にアドバイスできんのは、最初から見てたお前なんだよ」

俺は黙り込んだ。第一発見場所、動きの癖。先を読めれば打てる手も変わる。だから何でも責任を分散するシステムにしては珍しく、第一発見者の責任は重くなっている。俺はここにいないてはいけない。それは分かっていた。しかし。

「ケツに根張って最後まで見んだよ。そんで最後まで考えろ。それが俺らの仕事なんだ。ラクすんな」

見透かされた。俺は目を伏せた。自分のコンソールには変わり果てたカリナが映っている。相変わらず迷いの無い足取り。

メインモニターの赤いルートを見上げた。今のカリナもこのルートを見ているのだろうか。いつ

でも先陣を切っていた。迷いも無く最短のルート先へ先へと進む。それがカリナだった。たった一本のルートを。

「デスク」

俺はもう一度立ち上がった。

「提案があります」

その日は抜けるような青空だった。

カンケーから通報があって研究施設の中心部に入ると、事前に渡された案内図には無い大きな通路があった。よくある話だ。動遺体や違法な薬品など、後ろ暗いものを隠しておく秘密の区域。報告しても上が握り潰すことがほとんどだった。

「！」

俺はそこにルートを見た。足跡、ゴミ。人の痕跡。この先に人がいる。しかし、施設内の電圧が安定していない。安全のために電圧が低下するとシャッターは自動的に降りる。危険過ぎた。戻ろう、と声をかけようと振り返ると、カリナはためらいなく駆け出していた。

「おい！」俺は叫んだ。

「戻れなくなるぞ！」

カリナは足を止めてこちらを見かえして、にっこりと笑った。

「おい！」こんなときにそんなふうには笑うな、と言いたかったが、言葉にならない。

「この先に人が居る」カリナの笑顔は変わらない。

ああ、そうだ。分かってる。行きのルートは俺にも見える。しかし戻りのルートは無い。シャッターは閉まる。

「ああ。でもムリだ。シャッターが閉まる！ 戻ろう！」

カリナは微笑んだまま、顔をゆっくり横に振った。

俺は勘違いをしていた。認めたくなくて首を振った。カリナはルートを見つけていたわけじゃない。ルートから目を離せなかっただけだ。いままではたまたま戻りがあったけれど、今回は無い。それでもカリナはルートから目を離せない。早く何かしなければ。ルートより早く強く、カリナを呼ばなければ。

「きみが好きなんだ！」

カリナの笑顔がゆがんだ。笑顔のまま泣き出しそうな顔。俺は何かで間を埋めたくてもう一度叫んだ。

「カリナ！」

カリナの肩が震えているように見えた。ずっと見ていた切れ長の目。端から涙が伝う。

ごめん

そうだったような気がした。

走り去っていくカリナを追うことができなかった。一瞬電灯が強く輝き、弱々しく明滅した。

シャッターが閉まっていく。とっくにカリナの背中は見えなかった。

いつまでそこにいたのか覚えていない。誰かの腕で外まで引きずり出されて、仰向けに転がされ

たのは覚えている。人をバカにしたように底抜けの青空だった。

カリナがいなくなり、前々からこうなると思っていた、と他の連中は口を揃えた。なりふりかまわぬ突進。周囲を無視した突出。なんでそんなに目立ちたかったのかねえ。予想はしていたが、痴話喧嘩でカリナが去ったというものもいた。どれも違う。誰も分かっていない。

俺は片端から喧嘩を売ってすっかり孤立して、現場では単独行動を取るようになった。カリナから学んだルートを見る能力はまだ失われていないから成績は悪くない。正面きって文句をいえるものはいない。

いつも現場でルートの少し先にいるはずのカリナを見た。もう少し、もう少し先までいけば追いつけるはずだ。しかしいつもあと一歩が踏み出せなかった。どうしても、帰りのルートを見てしまう。俺はカリナと同じものを見ていたわけじゃなかった。俺は、ずっと一人だった。

あるとき上から呼び出しがかかった。カリナのことだった。群を抜いた成績と、不自然な最期。それに若くて美しい女。マスコミが関心を持ちはじめてもムリは無い。これは本当に個人の問題なのか？危険な勤務を組織的に容認していたのでは？安全対策は万全だったのか？

部屋に入ると机の向こうにお偉方が並んでいた。そのうちの一人が重苦しい声で「彼女は薬物中毒だった節がある」と言い放ったので耳を疑った。書類の束をぺらぺらめくりながら続ける。カリナは睡眠薬を常用していたらしい。かなり強力な種類のもので、量も多い。処方していたという医者証言もあった。

「我々も組織としてこの問題に当たらなければいけないとっていてね」とお偉方Aがいった。

「聞くとところによると、君も故人に並ぶほどの成績を納めているようだ。しかし、いくぶん振る舞いは危なかしいと聞いている」お偉方Bがいう。

「優秀な社員を失うわけにはいかない。異例だが、君は監視警備課に移って現場の力を活かしてもらうことも検討している」とC。

咳払いで少しの間があく。

「ところで、カリナくんのことだが、君はいつも一番近くにいたそうだね。何か気づくところはあったかな？」

ルートは見えている。神妙な顔でこう言えばいい。確かにカリナにはいくぶん変わったところがありましたね。それは嘘ではない。それだけで安全で安定した職が手に入る。お偉方が納得するように答えなければどうなるだろう。クビになるかもしれない。確かに成績は上げているが、代わりがないわけじゃない。

カリナは死んだ。もう帰ってこない。遺族もいない。意地張ってかばっても俺には何もない。この業界は狭いから「扱いにくい奴」なんて噂が流されたら、次も決まらないだろう。俺はただ一言言えばいい。それしかない。俺はひざの上で拳を固くにぎりしめた。

デスクと俺は休憩室でコーヒーをすすっていた。

「やるこたやった。あとは待つだけだ」

故障していないシャッターも開ける。これが俺の提案だった。

ルートがひとつしかないから、カリナの先導ですべてのゾンビがひとつの入り口に集中してしまう。だからルートをたくさん作って、ゾンビたちをバラけさせればいい。三十体なら二十分で壊せるシャッターも、半分になってくれれば四十分保つ。

「責任は全部俺が取る」とデスクが請け合って反対意見は封殺した。カメラマンを親指で指して「撮ってんだぜ。後で言い逃れもできねえよ」

実際は半分よりもさらに減ってくれることを期待していたが、実際その通りになった。三十分で最外郭のシャッターにたどり着いたのは四体。完全に壊される前にジュンケーが間に合うはずだ。今回の場合は、わざわざ中に入って確認するまでもない。そのままシャッターを補強して嚴重に閉鎖するだろう。

「あんだけの数だと直接制圧もあるかもしれねえな」

動遺体の数が多すぎると放置しておくリスクが大きくなる。基本的に直接の接触は避けるが、この場合はジュンケーが直接介入して制圧することもあった。

「デスク」

「なんだ」

「ジュンケーへの異動って難しいっすかね」

「おまえ、俺の話聞いてた？ すげえいいことってたと思ってんだけど」

「聞いてました。もう監視なめてないっす。だけど、俺、いまならもっとたくさんルートが見れる気がするんす」

「ルート？」

俺はカリナのことを話した。

「ハッ。そんでお前、お偉方ブン殴ったのかよ。よくクビになんなかったな」

「土下座しましたよ。その後」

カリナも俺も心身が消耗していたことにして、上は矛を納めた。マスコミに注目される中で社員を使い捨てにするような印象を与えるのも避けたかったんだろう。俺はクビにはならなかったが、ジュンケーを続けることもできずカンケーに異動になった。

「カッコわりいな」

「そっすね」

「ま、いろいろ見えるようになったってこったな。このスケベヤローが！」

デスクは笑った。

「いっちまえ。俺がかけあってやるよ。こんな危ねえ奴、下に置いとけねえからな。」

二ヶ月後、俺はひさしぶりに現場に入った。
あの日と同じ、抜けるような青空だった。